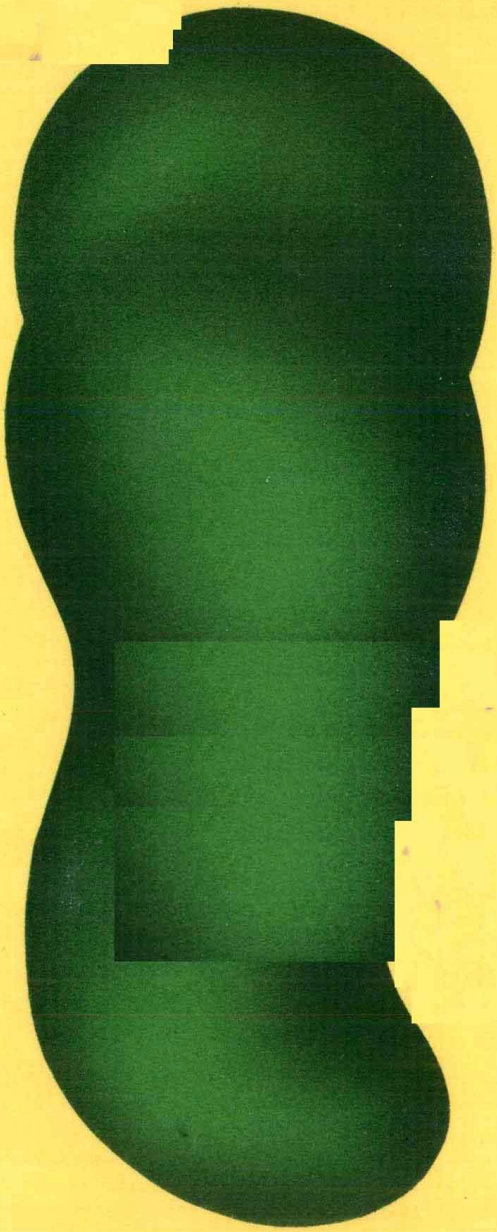
三本腕の男

小松左京

三本腕の男



小松左京

小松左京
昭和6年1月生れ
京都大学イタリア文学科卒
日本SF作家クラブ員
日本推理作家協会員
主な著書
「地には平和を」（早川書房）
「復活の日」（早川書房）
「未来の思想」（中公新書）
「最後の隠密」（立風書房）
「日本沈没」（光文社）

三本腕の男

昭和48年7月10日　第1刷発行
昭和48年8月10日　第2刷発行
¥540

三本腕の男

著　者　©小松左京
発行者　下野　博
印　刷　信毎書籍印刷株式会社／株式会社美術版画社
発行所　株式会社　立風書房
東京都品川区東五反田 3—6—18
電話東京（447）1191代
振替東京 74493　〒141

0093-3640-8909　落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

三本腕の男●目次

三本腕の男　5
フラフラ国始末記　53
時間エージェント　89
第一話　原人密輸作戦
第二話　一つ目小僧
第三話　幼児誘拐作戦
第四話　タイムトラブル
第五話　地図を挿せ
第六話　幻のTOKYO CITY
第七話　ジンギス汗の罰
第八話　耶馬台国騒動

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三本腕の男

装幀　辰巳四郎
本文イラスト　楢　喜八

三本腕の男

1

大きな男だった。

身長二メートルちかく、体重は百二十キロはあるだろう。黄色いポロシャツ一枚の上半身が、戸口いっぱいにふくれ上って、その上に赤い、精力的な顔がのっかっている。

「カーネル・ボールディング？」とぼくはたずねた。

「もと大佐（エクス・カーネル）だ……」といって、大男はニヤリと笑う。「昼間電話してきた……」

「但馬です……」とぼくはいった。「但馬信行です」

男はでかい毛むくじゃらの手を出して、ぼくの手をにぎった。汗ばんだ掌の中に、ぼくの手がすっぽり包みこまれてしまう。

「はいりたまえ……」といって、大佐——いや、もと大佐は体をひらいた。「遠慮はいらん、私一人だ」

体が動くと、あの外人特有の、甘ったるいチーズのような体臭がした。元大佐は汗をかいており、

その汗がにおう。そのにおいの中に、バーボンと、強いハヴァナの臭気がまじる。
「何をのむ？　――あいにくスコッチはないんだ。バーボン、ライ、ジン……コニャック……」
「バーボンでいいです」
「まちたまえ、いいものがある。ギリシャのブランディだ」
巨大な体が、部屋を横切って、さっさと身軽に動く。――いなかから出てきた、ハイスクールの甥をもてなしているみたいだ。ぼくは日本人としては小さい方じゃない。だが、この巨漢の前に出ると、まるで大きなおじさんの前に出た青二才になったような気分を味わわされる。
「いくらものこってないな――」ボールディング元大佐は、ほこりだらけの、細長い壜を出して明りにすかし、栓をぬくと、金魚の飼えそうな大きなチューリップグラスにどくどくとついだ。「姪がヨーロッパみやげにもってきて、自分でほとんど飲んでしまった。かるいよ、コークみたいだ。――私はこっちをやる。十五の年から、ずっとこれだ」
そういうと、彼は氷のとけかかったタンブラーに〝オールド・クロウ〟をたっぷりついだ。
ぼくはチューリップグラスをあげた。〝メタクサ〟――名はきいた事はあるが、飲むのははじめてだ。口にふくむと、パッとはじけるような芳香が口中から鼻腔へひろがる。舌を刺すアルコールの味ものこらない。のどをすべる芳醇さ以外は、何ものこらない。すばらしいブランディだ。
大佐がこっちを見てタンブラーをあげ、ぐいと飲んだ。相手が紹介状を見ている間に、ぼくは部屋の中を見わたす。
広いが、古くさい感じの部屋だ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

色のさめた代赭色のカーペット、マホガニー製のデスク、黒いレザー張りの椅子、ほこりっぽい、安い連れこみ宿の雰囲気をただよわせるようなシェードをつけた、大きなフロアスタンド――すべて一九三〇年代の感じだ。建物は、例の褐色砂岩つくりというやつで、――そう、ニューヨークは、もうすでに都市全体が古い街なのだ。ロックフェラー・プラザのカーテンウォールのビル街や、パンアメリカンビルがいかに新しく見えようとも街全体は一九二〇年代のシカゴ派の夢と、三〇年代のヤンキー上流階級の趣味に凍結されてしまっている。

「ガーランド上院議員とは、古い知り合いかね？」と、元大佐は紹介状のサインを見ながら、考えこむようにいう。

「いや――一度お会いしただけです」

「いつ？」

「この紹介状をもらう時に……」

フム、と鼻を鳴らして元大佐はまた考えこむ。――こちらの訪問の真意を、はかりかねているような顔つきだ。油をつけてきっちり撫でつけてある、うすい金髪を、太い指先でちょっと掻き、またバーボンをどくどくとつぐ。すごい酒量だ。だが、それは日本人から見ての話で、このごつい体のアメリカ人にとっては、ウイスキーの一本ぐらい、何でもないみたいだった。

「君は？――ジャーナリストか？」

「ええ……フリーランスです」

まさか、あまり売れないトップ屋だったともいえない。それに、アメリカなら、フリーランスの方

が幅がきく。
「で――何をききたいんだ？」
よし、チャンスだ。――元大佐どのは、思いあぐんだように眼をあげた。そのうすい、灰色の眼を、すくいあげるようにこちらの眼でとらえ、ちょっと息を吸って、深くのぞきこむ。
「アメリカについての、率直な御意見です」
ぼくは、相手の呼吸をはかって、しずかに、むこうの胸にしみこむような調子でいう。三秒――五秒で、相手の眼の中に驚きと、困惑と、狼狽があらわれる。
「合衆国（スティツ）の？」
元大佐は、眼をそらそうとしてできず、弱々しくもがくように、瞳をふるわせる――アルコールが、少しでも抵抗を弱めてくれている。
「それは――個人的意見かね？」
「ええ……」
「ガーランド議員が、私にきけといったのか？」
「そうじゃありません。ガーランド議員には、あなたを紹介してもらっただけです。――彼にも、同じテーマで意見をききました。それから紹介してもらいました」
「だが、なぜ私に……」ボールディング元大佐は不安そうにつぶやいた。「そういう事なら、もっとほかに、適当な連中がいるだろうに……」
「別に、なぜという事はありません。私に仕事を依頼してきたプロダクションがいろんなグループの

中から、無作為抽出でえらんだのです」

そうきいてはいるものの、本当にそうなのかどうかは知らない。ぼくは、いわばやとわれ調査員だ。特技を買われて、べらぼうな報酬を提示されてひきうけたものの、企画そのものの全貌については、まるきり知らされていない——プロダクションそのものが、本部はメルボルンにあるときいているが、どんなやつがボスで、どのくらいの規模のものだか皆目知らないのだ。ぼくは、日本のエージェントという男にあい、手配はそいつがやってくれた。あとはただ、わたされたリストにしたがって、順番にインタービューして行くだけだ。

いろんな国の、いろんな職業経歴別のグループ毎に、無作為抽出したというが、マイケル・E・ボールディング退役陸軍大佐は、なかなか興味のある経歴(キャリア)だった。ウェストポイントを出て、ほとんどすぐ、第二次大戦がはじまり、ヨーロッパ戦線へ行く。そこでCIC——対敵諜報部隊に配属され、それから連合軍総司令部付、大戦がすむと統参本部にしばらくいて、占領下の日本にも来ている。朝鮮戦争の時は、アジアのどこかにいた。それから国防省にはいり、中東方面の「工作」にも一役買った形跡もある。アフリカ、中米、南米と、いろんな所に彼の足跡が見出されるが、ついに佐官どまりだった所を見ると、失敗もだいぶあったのだろう。——というより、彼は根っからの武人で、身を挺しての「行動の人」であり、軍、国防総省という「役所」の機構の中を泳ぐのがうまくなかったらしいのだ。その証拠に、マクナマラの「コンピューター時代(エイジ)」になると、彼は次第に現場から遠ざけられて行く。最終経歴は、戦史研究所嘱託というわびしいものだ。二度目の夫人とは六年前から別居して、退職を機会に正式離婚、ルイジアナの農場つきの家を彼女にゆずり、彼女はいまそこで、娘とセール

スマン上りの四十男といっしょに住んでいる。
六十に近い元大佐殿はニューヨークに住み、二、三の会社のコンサルタントをやって、けっこう収入はあるらしい。古ぼけてはいるが、パーク・アヴェニューからちょっとひっこんだアパートの、三間つづきのフラットを借りてくらしているのだから、相当なものだろう。
「いかがでしょうか？」と、ぼくはいった。
——眼はあいかわらず、じっと相手の内部をのぞきこんでいた。
「ちょっと待ってくれ……」と彼はあえぐようにいった。——額に汗がにじんでおり、それを反射的に手の甲でぬぐった。「それを——君が、記事にするのかね？　どこかに発表するのかね？」
「いいえ——」ぼくは、相手をあやすように、やさしくいった。「記事にもしませんし、あなたの名前も、どこにも出ません。——ぼくは、いろんな人の意見をきいて、それを調査報告書にまとめる。それをもとにして、シナリオが書かれるんです。報告は、シナリオを書く参考にされますが、決して特定の個人がわかるような形はとらない……」
「映画か……いや、テレビかね？」
「両方でしょう。シリーズものと劇場用と、二つつくられるんじゃないかと思います」
「私をモデルにしたような人物はあらわれないだろうな？」
「絶対に、大丈夫です」
ぼくは、力をこめていってやる。——その実、本当はどんな事になるのか、まったく知らない。だが、相手を安心させ、腹の底で考えている事をうちあけさせるには、そういうしかないのだ。

「そうだな——」と、ボールディングは、ようやくタンブラーを口にもって行く。「少し考えさせてくれ……」

もういいだろう。三分以上、ぼくは彼の眼を見つめていた。視線をはなしても、彼は充分ぼくの期待にこたえてくれるはずだ。

2

彼はタンブラーをもったままたち上った。デスクの傍に行くと、太いハヴァナ葉巻をくわえて火をつけた。——大男の彼がくわえると、葉巻が小さく見える。ボールディングは、デスクの所に立ったまま、じっと考えこむように宙を見つめた。力づよい肺が葉巻をオレンジ色に強く光らせ、濛々と煙がたちこめる。

「そうだな……」と彼は、もう一度つぶやいた。「私にいわせてもらえば……」

ぼくは安心して、上着のポケットの中で録音機のスイッチをいれた。小型マイクが背広の折返し(ラベル)のボタン穴についている。

「そう——これはまったくの、個人的意見だが——軍人だったものとして率直にいわせてもらえば、アメリカは、もうだめだな……」

ぼくはちょっとびっくりしたような顔をして見せる。ついこの間まで軍人だった人物にしては、いささか率直すぎる意見だ。

「どうしてですか？」とぼくは水をむける。
「合衆国は、世界一ゆたかで、世界一巨大な力をもっている……」
「だが、その世界一巨大な力を、もう決して、フルには使えないだろう。——君たちの国も、もうあまりアメリカをあてにしない方がいい」
「核体制があってもですか？　今こそアメリカは、そのもっとも巨大な破壊力を、発射ボタンを押す指一本で発揮できるのでしょう？」
「いや、核体制は君、戦争抑止力にはなっても、戦闘力ではないよ。核という奴は使われたら、どっちみちおしまいなんだ。そのくらいは、わかるだろう？」
「ええ——しかし……」
「世界一巨大で、世界一ゆたかな——だが、私にいわせれば、そいつが命とりになりかかっている。いかに巨大な集塊産業（コングロマリット）や、世界企業（ワールド・エンタープライズ）があっても、産業だけでは戦争はできんよ。アポロ？　海洋開発？　だが、組織工学（システム・エンジニアリング）だけでも戦争はできん。アメリカは、あまりにも巨大で、ゆたかで、多様な社会になってしまったので、もはや〝全面戦争〟には突入できなくなりつつあるんだ。ルーズベルトの時代でさえ困難だったんだ」
「でも、彼はうまくやりましたね」とぼくはいった。「日米開戦前、ぼくたちの国の戦略家の一部も、あなたがいまいったのとまったく同じ、楽観的分析をやっていました。アメリカは、社会が複合型で巨大すぎ、まとまりにくい。産業界は、恐慌の痛手からたちなおっていない。だから、なかなか開戦にふみ切れないし、参戦しても、すぐ妥協してくるだろう、と……。しかし」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com